

## 子どもの心を育てる生涯学習

立教大学教授 岡本 包治

生涯学習が、子どもたちの学校教育の充実とともに学校外における諸体験の充実を意図したものであることは今更論ずるまでもない。学校週五日制は、そのことを社会の制度として正当に位置付けたものであることも明白であろう。

たとえば、子どもたちが学校外の体験としてもつ自然体験がその一つである。あるいは動物との接触体験もこれに外ならない。生涯学習の主張は、これらの体験を通しての「豊かな心づくり」を意図したものである。

学校外の体験として、野外や山において鳥と出会う体験をもった子ども、海でカモメに出会った子ども、あるいは家庭などで鳥を飼ったことのある子どもなどは、どこかで鳥を見た時には「あの鳥は可愛い」とか「あの鳥はカッコいい」とか「あの鳥は、こういう声で鳴くのだよ」とか言う。この子どもたちの心は豊かに育っている。

しかし、そんな体験のない子ども、すなわち鳥に出会う体験などはなく、専ら受験勉強ばかりさせられていた子どもの中には、鳥といえば、「鳥料理を食べた」という体験しかもっていないような子どももいる。だから、そのような子どもは「鳥」と聞いて、「あの

鳥料理はウマイ」とか「あの鳥料理はマズイ」としか思わないことになりやすい。子どもが「鳥」と聞いて、「うまい」とか「まずい」としか思わなくなったら、やはり問題なのである。

学校週五日制は、家庭における家族との触れ合いをも意図するものである。私たちの年代の人間は、子どもの頃に近所のおばあさんが亡くなったのを知った時に、そのことを親に告げると、親は、必ず私たちの目の前で、そのおばあさんのことをほめちぎったものなのである。「お父さんが子どものころに世話になった」「おばあちゃんのたくあん漬けは日本一だった」とかであった。

しかし近頃は、子どもたちが近所のおばあさんの死を親に告げると、親の中には、子どもの前で「ああ、あれであの家のお嫁さんはホッとしているわよ」など発言する人もいたりするのである。子どもは、何と感ずるのであろうか。

子どもたちの心が荒れていくように家庭で親が仕向けているといってもよい。恐ろしいことになってきた。生涯学習をめぐる難しい話は不要である。子どもが「豊かな心」をもつこと、それが生涯学習なのである。

## 生涯学習と情報活用能力の育成 ーコンピュータの教育利用を通してー

広島市教育センター コンピュータ教育利用研究プロジェクト

「人間的であり続けるための方法は、学習を続けることである」とは、生涯学習の必要性を提唱したロバート・ハッチンス (R.M. Hutchins) の言葉である。生涯学習は、学習者自らが主体的、自発的な意思に基づき、自己に適した方法で学習を進めることを基本とし、その成果を自己の生活に生かし自己実現を図ることを目的としている。

### 1 生涯学習と自己教育力の育成

生涯学習の主体者は学習者本人である。生涯学習を進めるためには、学習者は次のような資質を身に付けておく必要がある。

- ①解決したい問題を生み出す力 (問題発見力)
- ②問題解決に積極的に挑む知的探求心 (学習意欲)
- ③主体的に目標を設定し、必要な知識・情報を選択・活用する能力 (学習目的、学ぶ力)
- ④困難に立ち向かう強い意志力 (集中心、向上心)

このような資質こそ、近年学校教育で育成することが強く求められている自己教育力なのである。この自己教育力は、生涯学習を進める上で基盤となる力であるとともに、情報化、国際化など急速に進展する社会の変化に主体的に対応する力ともなるのである。

### 2 自己教育力と情報活用能力

情報活用能力は、「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」と定義されている。換言すれば、情報のよき受け手、送り手となるための資質であると言えよう。この能力は自己教育力の様相の一部であり、学習者自らが設定した課題を解決するための大きな力となるのではな

いだろうか。したがって、その育成は学校教育において緊要な教育課題と言えよう。この能力の内容として次のことが挙げられる。

- ①情報を目的に応じて取捨選択し、処理する力
- ②情報をつくり出し、それを伝達する力
- ③情報の重要性を認識する力
- ④情報に対する責任感

これらの内容は、学校の様々な教育活動を通して育成されているが、その手だての一つとしてコンピュータの教育利用がある。

### 3 コンピュータの特性と教育利用の目的

#### (1) コンピュータの特性

コンピュータの特性 (利点) として次のことが挙げられる。

- ①大量なデータを記憶できる
- ②データの高速処理ができる
- ③正確な処理ができる
- ④何度でも繰り返しができる
- ⑤個々の学習履歴が記憶できる

これらの中にはコンピュータのみがもてる特性でないものもあるが、利用する目的に応じてコンピュータの特性を生かし利用していくことが大切であろう。

#### (2) コンピュータの教育利用の目的

利用の目的を、学習指導での利用に限定すると、次のように分類できる。

##### ア コンピュータ・リテラシーを育成する道具としての利用

これは、コンピュータなどの情報手段そのものを活用する能力 (コンピュータの操作能力など) を育成することを目的としている (中学校技術・家庭科「情報基礎」)。

##### イ 主体的な学習活動の道具としての利用

これは、コンピュータを問題解決活動、

情報の表現・創造活動などの知的、創造的なツール（学習道具）として子どもが主体的に活用することを目的としている。具体的な活用場面としては、①必要な情報を収集したり取捨選択し活用したりする場面（データベースなどによる情報検索機能の利用）、②天体の運動のシミュレーション（模擬実験）から事象の因果関係を量的に考察したりする場面（シミュレーション機能の利用）、③統計資料をグラフ化したり楽譜のデータを入力し作曲したりする場面（計測・制御、図形作成機能の利用）などがある。

ウ 学習指導の道具としての利用

これは、学習指導においてコンピュータを学習情報の提示、学習意欲の喚起、学習内容の定着などのためのツールとして活用することを目的としている。

このような利用を通して、子どもの情報を整理・選択・処理するなどの能力を高めるとともに、学習の個別化が図られ学習者としての自覚、喜びを実感させることができるのではないだろうか。

また、コンピュータを有機的に利用させるためには、学習形態にも配慮する必要がある。利用形態には一斉学習での利用、グループ学習での利用、そして個別学習での利用がある。一斉学習ではコンピュータを情報提示用として利用することが中心となり授業の導入やまとめの段階での利用となる。また、グループ学習では様々なデータから必要なデータを活用して課題解決したりする段階での利用となる。そして、個別学習では学習内容の定着を図る段階での利用となる。

4 情報活用能力を育てるコンピュータの利用例 ー情報検索機能を生かした利用ー

右図は、第5学年の単元「近代工業と公害」の学習において活用した学習ソフトのコースウェアとソフト画面の一部である。子

どもは自ら設定した課題に合わせて学習ソフトのコースを選び課題解決に取り組む。その過程でコンピュータ内にある様々な情報から、目的に応じて必要な情報を選択・活用し、課題に対する結論を導き出す。

メニュー画面

1	広島市の自然環境
2	広島市の社会環境
3	広島市の生活型公害
4	言葉の辞典
5	学習の終了

サブメニュー画面

1	2	3	4
1 広島市の地形 2 広島市の気候	1 広島市の人口分布 2 広島市の土地利用 3 広島市の道路 4 広島市の下水道	1 広島市の大気汚染 2 広島市の自動車騒音 3 広島市の河川の汚染	1 自然環境に関する言葉 2 社会環境に関する言葉 3 公害に関する言葉 4 その他



図 学習ソフトのコースウェア

5 終わりに

情報活用能力は、様々なメディアからの情報が氾濫する現在の社会や一層高度に情報化していくこれからの社会に、主体的に対応する力となり、生涯学習を促進する大きな力ともなる。したがって、情報活用能力は、子どもたちだけでなく、生涯学習を進めている私たちにとっても必要であり、身に付けるべき能力だと言える。コンピュータの教育利用は情報活用能力の育成のための手段であるが、子どもたちと共に利用することで、教師自身も学ぶこと、利用することの良さを味わいたいものである。（広島市教育センター指導主事 正坊地武生、江田英俊、吉竹邦昭、松浦俊雄）

## 「揺れる子どもの自己像」の概要

—指定都市教育研究所連盟第10次共同研究から—

広島市教育センター指導主事 越智文嗣

指定都市教育研究所連盟第10次共同研究は、平成3年4月にスタートし、研究期間3年を経て、本年度は、その内容をまとめる年である。そこで、今回はその研究の概要を紹介する。

### 研究のねらい

この研究に取り組んだ主なねらいは、次の2点である。

- ① 社会の変化や情報の氾濫の中で、子どもの姿が見えにくくなっている。そこで、今の子どもたちの様々な生活場面での意識や行動を探り、真の自律への支援の方途を明らかにする。
- ② 今の子どもたちの行動に強く影響を及ぼしているであろうと予測される要素の1つに、みんなと同じであるのがよいという思い（「人並み意識」）がある。この「人並み意識」に視点を当てて調査研究を行い、今後の教育において強調していかねばならない事柄を明らかにする。

今の子どもたちは、「自分らしくありたい」という意識と、「みんなと同じでありたい」という意識とを抱き、葛藤している。その狭間において、「ほどほどに」というバランス感覚を身に付けてきたのではないかと考えられる。この研究では、子どもたちは、どのような生き方観の傾向を持っているのか、子どもの生活意識や行動からとらえようとした。

### 研究の方法

子どもの生活意識や行動をとらえるため、

11指定都市の小・中学生13,200名を対象に調査を実施した。調査の内容は、友達関係、遊び、健康、学習、そして自己像の5つの分野で構成した。調査は、50の設問を設定し、質問紙法により実施した。

### 研究の内容

- 友達関係 自信のなさや友達からどう思われているかという不安が見え隠れし、友達の輪の中で絶対的存在感を得ようとする姿から、子どもの隠された人間関係を探る。
- 遊び 遊びの内容や意欲などから、子どもの意識や行動をとらえ、これらを特徴付けている要因や背景を探る。
- 健康 子どもが健康に対してどのような意識を持ち、どのような状態にあるのかなど、精神的・社会的側面をも含めて探る。
- 学習 学習意欲と意志の形成、学習の仕方の習得、生き方の探求が重視される中で、子どもは、学習を何のためにしていると思っているのかなどを探り、望ましい学習観の育成の在り方を探る。
- 自己像 希薄な人間関係や多様な価値観、さらには、情報過多の環境の中で、子どもの揺れる自己像の原因や背景を探る。そして、子どもの望ましい自己形成のために子どもと大人は、それぞれ何をどうすればよいのかを明らかにする。

この研究の具体的な内容は、平成6年4月に指定都市教育研究所連盟第10次共同研究としてまとめられ刊行される予定である。学校、家庭、地域でお役に立つことができれば願う。ご高覧の上、ご批評を賜れば幸いである。

教育実践基礎講座 (11)

# 美術科における新しい学力観に基づく評価の改善と工夫

広島市教育センター指導主事 福原正明

## 新しい学力観に基づく美術科の目標

今回の学習指導要領の改訂では、美術による人間形成の実現を目指す立場から、美術科の目標は次のように改善された。

表現及び鑑賞の活動を通して……………領域
造形的な創造活動の能力を伸ばすとともに……………①能力的目標
創造の喜びを味わわせ、美術を愛好する心情を育て……………②態度・情意的目標
豊かな情操を養う……………③総合的目標

①の能力的目標（中学校指導書美術編に“10の能力”として示されている）と、豊かな自己実現につながる②の態度・情意的目標とが総合されて、③の豊かな情操を養うことを目指すことになる。

## 観点別学習状況の評価の考え方

指導要録では、目標の改善の意図を踏まえて評価の観点が表示されている（表）。この4つの観点は、特に学習過程において情意的側面（関心・意欲・態度）を重視し、生徒の学習活動を励ます評価を行うことを通して生徒の可能性を伸ばすことを主眼としている。

表のAの観点は、教科の目標の態度・情意的目標の達成について評価する観点である。生徒がいかに主体的に取り組もうとしているかを個人内評価を中心にして見ていく。

B、Cの観点は、従来の「表現の能力」と「発想や構想の能力」と「創造的な技能」とに分けたものである。

Bの観点は、制作前段階をきちんと評価す

表 美術科の評価の観点及び趣旨

美術科の評価の観点	趣 旨
A 美術への関心・意欲・態度	美術に親しみ、主体的に表現や鑑賞の創造活動に取り組み、創造の喜びを味わおうとする。
B 発想や構想の能力	感じ取ったことや考えたことなどを基に、想像力を働かせて豊かに発想をし、よさや美しさなどを考え、創造的な表現の構想をする。
C 創造的な技能	表現の意図に応じて創造的な技能や造形感覚を生かす。
D 鑑賞の能力	美術作品などに親しみ、そのよさや美しさなどを感取ったり、味わったりする。

ることで創造的思考力を育成しようとするものである。下絵やアイデアスケッチなどによって発想や構想段階での工夫や努力、進歩・成長の過程を高く評価することが必要である。

Cの観点は、単なる技法の習得から個性的・創造的能力としての技能であることが強調されたものである。主題を十分に表すために自分にふさわしい技術を習得・活用して、独自の表現をする感覚や技能が育ってきたかを具体的な視点を定めて、個人内で評価する。

Dの観点は、「感受の能力」と「知識・理解の能力」についての観点である。感じ取ったことを表現にいかんにか生かしているかを評価することも大切である。

## 具体的な評価の工夫例

・制作カード（図）を使って

授業後、生徒に自己評価と工程の進捗を制作カードに記入させる。それを基に教師はA～Dの観点から評価する（図中の※印）。題材により内容を工夫する。

制作カード “板材による入れ物”		2年（ ）組（ ）番 氏名（ ）						
作品名（ ） 制作意図（※A）								
工程	自己評価の内容（観点）	評価	理由と感想	準備	態度	進捗	先生から	
1 目的・条件	目的や条件を調べたか	※A・B		※A	※A	※A		
2 アイデア	たくさんアイデアが出たか	※A・B						
10 塗装	むらなく美しく塗れたか	※C						
11 鑑賞	自分や友達の作品はどうか	※D						
制作を終えての感想（※D）								
評価、準備、態度の欄は、3は（よくできた）・2（普通）・1（努力不足・うまくいかなかった）で自己評価し、進捗の欄は取り組んだ月 日 を記入								

図 制作カード

## 教育センターひろば

### 教養講座

平成5年12月3日(金)、NHK解説委員の伊藤和明先生をお迎えし、広島市青少年センターで教養講座を開催しました。約400名の方々が受講され、大変好評でした。



### 公開講座

本年度は22名の先生方が9月から11月の3か月間、教育センター及び在勤校において研究されました。

平成5年度 広島市立学校教育研究生

校種	研究部門	氏名	所属校(園)名
小 学 校	国語科教育	加藤 之典	戸山小学校
	社会科教育	神明 宏栄	梅林小学校
	算数科教育	藤川 照彦	五日市南小学校
	理科教育	橋本 賢一	己斐東小学校
		横山 健	温品小学校
	音楽科教育	瀬良みづほ	戸坂小学校
	図画工作科教育	岡部葉百合	井口台小学校
	特別活動	河田 歳子	美鈴が丘小学校
	生徒指導	山野 和子	五日市小学校
保健管理	柳原ひとみ	皆実小学校	
中 学 校	国語科教育	脇山 喜行	観音中学校
	数学科教育	神原 一之	白木中学校
	音楽科教育	松前 良昌	二葉中学校
	技術・家庭科教育	花本 智子	口田中学校
	保健体育科教育	高畑 伸穂	安西中学校
	外国語(英語)科教育	小薮 和子	安佐中学校
	障害児教育	熊谷 英行	翠町中学校
	教育相談	高島 優	牛田中学校
高 等 学 校	理科教育	藤岡 哲	美鈴が丘高等学校
	家庭科教育	久保田まゆみ	広島商業高等学校
	教育工学	三浦 敏幸	安佐北高等学校
幼稚園	幼稚園教育	井筒 敦子	北紙園幼稚園

### コンピュータ教育利用研究プロジェクト

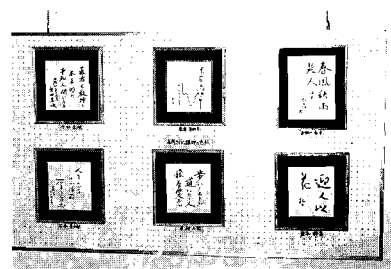
教育センターでは、コンピュータ教育利用に関する研究を進めるに当たって、次の先生方に研究員をお願いしています。

平成5年度コンピュータ教育利用研究プロジェクト研究員

校種	教科	氏名	所属校名
小 学 校	社会科	周田 光芳	吉島小学校
		中居 芳樹	船越小学校
	算数科	宮田 稔	深川小学校
		甲斐 清	白鳥小学校
	理科	原 英之	原小学校
山原 潤		長束小学校	
高 等 学 校	数学科	柳 義信	美鈴が丘高等学校
		菅本 和秀	沼田高等学校
	理科	守山 武正	基町高等学校
		阿部 修三	安佐北高等学校
	家庭科	佐々木弥生	舟入高等学校
		堀岡 浩子	安佐北高等学校

### 展示

教育センターの2階に、教養講座などの講師の方々に書いていただいた色紙を展示しています。ご覧ください。



題字 広島市立長束小学校校長 佐藤 陽祐  
表紙絵 広島市立福木中学校教頭 濱田 昭法

### 編集後記

年度末を迎え、いろいろご多用のことと存じます。

本年度最後の所報をお届けします。今後の指導の充実にご活用ください。